



第1回 大河ドラマ「風林火山」をめぐって 平成18年9月19日

講師 佐倉一徳さん NHK長野放送局企画総務部副部長
樋口 博さん 長野市産業振興部観光課課長

第2回 もっと楽しくて、元気な街づくりを 平成18年10月23日

講師 久米えみさん ながのクラッセ会長
樋口敦子さん ながのまちづくりカフェメンバー

第3回 スポーツによる街づくりを 平成18年11月21日

講師 鷺沢幸一さん アスレながの事務局長
室賀 豊さん 長野市アイスホッケー協会理事

第4回 写真で見る長野の街並み 平成19年1月23日

講師 清水隆史さん フォトグラファーほか
常盤昭二さん CMディレクター

わいがやサロンスペシャル
スポーツによるコミュニティ再生 平成19年2月22日

講師 二宮 清純さん スポーツジャーナリスト

第5回 健康と美容を保つために 平成19年3月22日

講師 虎羽里(トラバリ)ゼーラさん アーユルヴェーダ・健康セラピスト

第6回 環境と街づくり

ばていお大門・TOiGOの設計に参画して 平成19年4月23日
講師 竜野泰一さん 株式会社エーシーエ設計 取締役副社長 [一級建築士]

第7回 信濃グランセローズの挑戦 平成19年5月21日

講師 木田 勇さん 信濃グランセローズ監督

第8回 スポーツマンシップの大切さ 平成19年8月29日

講師 荻原健司さん 参議院議員・五輪金メダリスト

第9回 トウガラシの尽きせぬ魅力/
「農」による地域活性を探る 平成19年10月24日

講師 松島憲一さん 信州大学大学院農学研究科 准教授

第10回 命のバトンを渡す「ピオトープ」/
長野市をピオトープネットワークシティに 平成19年11月14日

講師 松岡保正さん 国立長野工業高等専門学校 環境都市工学科教授

わいがやサロンスペシャル
長野・考/長野の明日を話そう 平成20年2月14日

講師 中馬清福さん 信濃毎日新聞主筆

第11回 簡単・おいしい・オシャレ/わたしのレシピができるまで 平成20年3月26日

講師 浜このみさん クッキング・コーディネーター

第12回 あなたのからだは「築何年」ですか? 平成20年7月14日

講師 角本浩二さん バランスアドバイザー 長野県健康管理士会会長

第13回 アメリカ生活で感じたあれこれ

—変化に対して前向きになることの大切さ— 平成20年8月19日

講師 針谷友久さん 東京中小企業投資育成株式会社 主任(長野県担当)

第14回 市役所第一庁舎及び長野市民会館の在り方を考える 平成20年9月16日

講師 水野守也さん 長野市総務部次長 兼庶務課長

第15回 長野バルセイロー 優勝報告&JFL昇格への挑戦 平成20年10月29日

講師 バドウ・ピエイラ監督、薩川了洋コーチ、貞富信宏キャプテン

第16回 農業再生とブランド化 平成20年12月3日

講師 町田良夫さん 社団法人長野市農業公社 常務理事

第17回 地上の楽園は馬の背にあり 平成21年2月18日

講師 中山 修さん 中山法律事務所 弁護士

第18回 循環備蓄型の農業の実践
—宇宙のリズムにあった農業で一次産業の再生を試みる— 平成21年6月3日

講師 塩澤研一さん (財)いのちの森文化財団副理事長 (株)水輪ナチュラルファーム代表取締役

第19回 郷土を包む「おやき」 平成21年7月14日

講師 小出陽子さん (同)ふぎっ子のお八起 代表/信州おやきブランド化委員会 研究会リーダー

第20回 信州の伝統から生まれる食文化
—漬物の新しい風— 平成21年9月2日

講師 宮城恵美子さん (有)宮城商店専務取締役/木の花屋

第21回 飯綱高原を、もっと住みよく、おもしろく! 平成21年11月24日

講師 志村雅由さん NPO法人 飯綱高原よっこらしょ/代表理事

第22回 JFL昇格に向けて 平成22年3月17日

講師 薩川了洋さん AC長野バルセイロー新監督

第23回 先人の知恵を受け継ぐ〜トチの実、雑穀、あんぼ〜 平成22年5月25日

講師 石沢一男さん (有)田舎工房 代表取締役

第24回 3度目でつかんだオリンピック出場 平成22年7月28日

講師 新谷志保美さん バンクーバーオリンピック代表 (株)竹村製作所 勤務



Nagano Urban Policy Research Institute

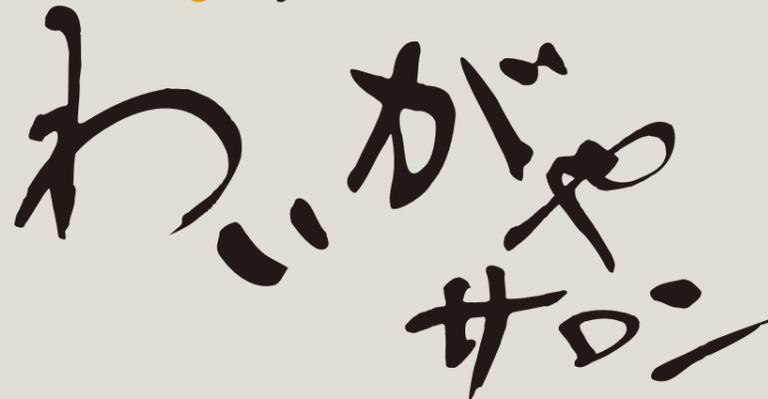
NPO法人 長野都市経営研究所

〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1丸本ビル2F

TEL.026-235-7911 FAX.026-235-6166

www.nupri.or.jp

e-mail: nupri@nupri.or.jp



通信

Vol. 25

2010.10



Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人 長野都市経営研究所

第25回 逃げないスケルトン ～夢と感動と勇気を～

平成22年9月15日(水) 18:00~20:30

講師／越 和宏さん スケルトン競技3大会オリンピック日本代表 (株)システックス所属

■座長 岩野 彰 場所／NUPRI事務所 TEL.026-235-7911



こし かずひろ
1964年生まれ、木曾郡王滝村出身。大学よりボブスレーを始め、その後、日本人で初めてのスケルトン選手に。ワールドカップ優勝、オリンピックに3回出場。長野市在住

9月15日のサロンはてんこ盛り、メインはもちろんスケルトンの日本における第一人者にしてバンクーバーオリンピックの最年長出場者・越和宏さんの講演ですが、途中いったん中断していただいて6時30分「長野県の地酒1万人乾杯イベント」にNUPRIも参加。講演に戻って終了後には鷺沢市長から長野オリンピック記念基金助成事業終了により創設する「ながの夢応援基金」アピールがなされました。

山の向こうへ行きたい！

生まれ育ったのは王滝村です。信仰の山・御嶽山はじめ山に囲まれているせいか、小さいときから、いつか山の向こうに行きたい、田舎から出てどこかへ行きたい、と思っていました。スキーが盛んで、スキーをやっている、階段を登るように頂上に行け、いつかよそに行ける、と思ひ込み、のめりこみました。同時に、女の子にもてたい、有名になりたいという気持ちも常にもっていた。ところが小中では肥満児。体型、才能とも他の人がやっているスポーツでは頭打ちと気付

き(自分って頭悪いと思っていましたが、これに気付いたのは頭イイかも!?)、砲丸投げに軌道修正したのですがこの競技はもてないですね(笑)。さて、高校卒業後は就職と思っていたところ、頭悪い組の仲間が「大学に行く」と言い出した。つられて親の懐考えずに体育大学進学を決め、案内を取り寄せると「数多くのボブスレー選手を出しています」という1行が目に入って、マイナー競技だったら努力せず有名になれるかも、村に銅像立つかもと夢を描いたのがボブスレーとの出会いです。

どんなに苦しくても逃げない。

ほかの体育大学は落ちまして、結局ボブスレー部があるとあった仙台大学に入りました。仙台も王滝に比べれば都会、誘惑がある。そうこうして入部したのは入学1カ月後。皆さんの会社でも最初の1カ月は会社に馴染む大事な期間だと思います。大学の部活もそうだったのです。とてもじゃないけれどオリンピックを目指している部員たちのトレーニングについていけない。上下関係も厳しい。頭の中は「どうやってやめようか」ばかりになって、「医者に行ったら障害が出るからすぐやめろと言われて」と嘘をついた。楽になったのも束の間、罪悪感にさいなまれました。その後の大学生活は、罪悪感との戦いでした。大学4年の秋、このままでは社会に出てもロクな人間にならない、と真剣に思い、ボブスレー部にもう一度戻ることを決意しました。簡単ではありませんでしたが、ボブスレー部に戻ることが出来ました。このことがあって以来、逃げない、と決めました。



6時30分、テレビのカウントダウンとともに地酒・季節限定「ひやおろし」で乾杯(信州醸熟和酒の会企画/当夜の登録総計は6,744人)

スケルトンとの出会い

卒業後、就職したのは長野市。冬季オリンピック開催地を国内5都市で立候補したことで、ボブスレーの経験者がいないので採用されました。

アルペールビル五輪選考会で外れ、競技をやめるかとなったとき、「スケルトン選手が日本には1人もいないからやらないか」というオファーが。とても危険らしい。けれども自分が、有名に、そして、世界一になるための選択肢はスケルトンしかない——27歳でした。

1999年ワールドカップ初優勝(33歳)、2001年も優勝し、とうとうソルトレークオリンピック!...37歳で夢を叶えることができたのです。トリノ、そして今冬のバンクーバー五輪には最年長選手45歳で出場を果たしました。

スポンサー、地元、応援してくれる方々に感謝。

スポーツは用具、遠征等々お金がかかりますので何としてもスポンサー企業をみつけなくてはなりません。当初は温情で雇っていただいていたが、思ってもいないことを探りあったり、喧嘩してしまったり、誠意を尽くしているはずなのに社員の方から理解を得られなかったりしました。それで、ある時から生意気ではありますが、契約を交わさしてもらうことにしました。(株)システックスの北村社長と出会ったのは前の会社との1年延長の契約が切れるとき。システックスとの契約はトリノオリンピックまででしたが、「お前がやる気だったら」と41歳の男に契約続行してくれました。現在、システ



スには「スケルトンクラブ」というかたちで私と若手がお世話になっており、会社は社会貢献の一環としてスポーツ振興を打ち出しています。

長野市に住んで地元の皆さんから励ましてもらって感謝しています(物心両面、たとえば野菜が玄関先に置かれていることも)。

しかし全国に200人いるスケルトン選手たちは皆一様に非常に苦しいです。若い選手が安心して競技に打ち込めるよう、長野市の皆さん、応援をお願いします!!

講師は前日まで国際スケルトン連盟会議のためアメリカに滞在、フライト・アクシデントをくぐり抜けて当夜に駆けつけた由。目標(約束)に向かって困難を乗り越え、突き進むアスリート魂に聴講者も引きこまれました。

お話をお聞きして

「ウン十年前の子どもたちは、竹スキーと木箱で作った橇で城山の坂でよく遊んだものです。日本で、アジアで唯一の滑走場所を備えているのが長野ならば、橇競技を身近なものとする手始めに子ども橇大会(将来的には全国大会)を開催するのはどうでしょう? (竹スキーの生産復活から始めないといけません)」(M) / 「底辺を広げること、強化策をとって『結果』を出し、競技そのものへの関心を集める。その2つを同時に進めることが必要でしょうね」(W)



スケルトンはボブスレーと違って身体を守るボディを持たない。頭を進行方向に向け、腹ばいで時速120kmをつま先で舵取りし、ブレーキなし=手の平で速度を落とす。危険という理由でオリンピック種目から外されたが、ソルトレーク大会で復活